2113　離島覚書（愛媛県・比岐島）

令和３年 10 月 19 日

ゆきひめ

比岐島（ひきじま）は今治港の東約７㎞に位置する東西に細長い島で、面積は 0.30 ㎞^{2}、周囲は 3.5 ㎞である。近くに小比岐島、約 3.4 ㎞南に平市島（へいちじま）、小平市島があり、何れも無人島だ。

慶長年間（1596～1615 年）に松を植栽し、その茂った松を維持管理する守役人を比岐島に入島させたのが定住の始まりといわれている。その後、対岸の桜井の漁師が移住し、開拓が始まった。以来、10 戸ほどに世帯が増えたが、数年前に最後の家族が島を去り、現在は無人島になっている。

島にはだいぶ以前に今治と魚島を結ぶ定期船が立ち寄ったこともあるが、その後長い間定期航路は開設されてこなかった。したがって島に渡るには船をチャーターしなければならない。今治市の観光協会に連絡し、「せと観光ボート」を紹介してもらった。事前に連絡を入れると、島の浮桟橋が台風で壊れたため満潮時でないと船を着けられないとのことで、９時 30 分に今治内港まで来るようにとのことだった。

前日今治に入り、今治ステーションホテルに泊まる。朝、徒歩で今治内港に向かう。港内を歩き回ってクリーム色の「ゆきひめ」という船を探したが見当たらない。携帯電話に連絡すると、第１桟橋の端に停めているとのこと。急いでそちらに向かった。

「ゆきひめ」は全長 18m、定員 72 名の観光船で、２階にはデッキもついている。10 年ほど前に就航したようだ。料金は４万円と言われていたが、これほどの船を１人で借り切るのだからやむを得ない。

広島県の鞆から島伝いを遊覧する仕事もしていて、活動範囲は瀬戸内海全域に及ぶという。コロナ禍にあって顧客は極端に減っていたが、緊急事態宣言が解除されてから人の動き

が活発になり、急に仕事が増えてきたという。

船長は森忠幸さん（70 歳）で、若いころから比岐島に通っており、島を熟知している。大型の観光船なので乗組員を 1 人配置する決まりになっているのだろう。船長と同姓の森さんという中年の男性も乗り組んでいる。彼は若いころから室戸のマグロ船に乗っており、海の仕事はお手の物だ。当初は遠洋マグロ延縄漁船に乗っていたから、沖ノ鳥島などにも行ったことがあるようでやけに島に詳しい。その後 19 トン型の近海マグロ延縄漁船に乗り換え、最後の航海が東日本大震災直前の 2011 年２月に塩釜港に入った時だったという。最近、せと観光ボートに就職したようだ。

９時 17 分に今治港を出港。約 20 分で比岐島に到着した。比岐島を訪ねる人は時々いるようで、以前、全国の三角点を巡っている人を連れてきたことがあるという。コンクリート製の突堤に船を横付けて上陸した。

今治港第一桟橋に停泊中のゆきひめ（左）、比岐島の突堤にて森忠幸船長と森乗組員（右）

廃屋

比岐島の集落は島の南岸東部にある小さな湾岸に形成されていた。10 戸ほどの住宅がそのまま放置されており、草木に覆われ、一部はすでに朽ち果てている。

2015 年の国勢調査時には１世帯３人が住んでいた。この一家の家は防波堤の正面にあり、表札に早瀬義鷹・アキミと書いてあった。森船長によると、ご夫婦は高齢のため数年前に本土側の施設に入居し、息子さんは本土側に住んでいるという。表札の両側にアワビの殻が吊るしてあった。このような風習は初めて見た。やはり森さんによるとアワビの殻は蛇よけの呪いだという。

ちなみに全国の離島を旅している斎藤潤さんは 2010 年２月に比岐島を訪れているが、この時点では３戸６人が生活していた。早瀬さん一家３人と、老夫婦、1 人暮らしのお婆さんの３人だった。また、2012 年４月に地域おこし協力隊が訪れた時は早瀬さん１家だけになっていた。

後述するように小中学校跡に手書きで島の歴史が掲げられていたが、それによると 1969（昭和 44）年当時、10 世帯 43 人が住んでいたことになっている。すでにこの時点では人口のピークを過ぎているので、最盛期には 70 人ほどがこの島で暮らしていたようだ。

空き家には生活用品や農機具など種々雑多な品々がそのまま放置されている。本土での生活に必要なものだけを持ち出し、不要なものは全て残していったのだろう。

人が住んでいないから、至るところに蜘蛛の巣が張り巡らされ、いちいち払いながら進まなければならず閉口する。また家の裏にはイノシシが掘り返した跡がたくさんあり、この島も瀬戸内海の他の島と同様、イノシシの天国となっていた。

旧島民以外でこの島を訪れるのは、３ヶ月に１回の頻度で灯台のメンテナンスにやってくる海上保安庁の職員ぐらいで、釣り人もほとんど来ない。ごくまれに私のような島に興味を持っている人が来る程度なのだ。

最後まで残っていた早瀬さんの住宅（左）、防波堤沿いに立ち並ぶ比岐島の集落（右）

自家発電と井戸

島には電気も水道も通っていなかった。もちろん下水道もなく、唯一の公的な生活インフラは 1960（昭和 35）年に電話が使えるようになっただけだった。

集落から山に登る途中に発電小屋が建っていた。中には今でも使えそうな重油式の発電機が置かれていた。ここから各家に配電され、護岸沿いの道路には外灯もあったので、道を歩くにも不便はなかったと思われる。一日のうちの発電時間は限られていたから、電気冷蔵庫は使えない。このためプロパンガスを冷媒としたガス冷蔵庫があったという。

水はもっぱら井戸水を使った。集落の数カ所に井戸があったから、水の運搬の労力はそれほどかからなかったと推察される。森船長によると、井戸の水面が海面よりも低いにもかかわらず、塩気はほとんど感じられなかったという。それだけ山からの淡水の圧力が勝っていたのかもしれない。

発生した屎尿はおそらく海藻と混ぜ、ミカンなどの肥料にしていたと思われる。

発電機室に残る自家発電機（左）、旧小学校裏の井戸（右）

もちろん島には商店も郵便局も診療所もなかった。生活は都市住民には想像できないほど不便このうえなかったと思われる。それでも生まれた時からこうした生活をしていれば不便を不便と感じなかったのだろう。しかし子供たちが島の中学校を卒業し、本土の便利な暮らしを経験すると、島の暮らしの不便さを痛感したにちがいない。日本の経済発展とともに島を離れる人が増えたのはこうした生活環境の不備が大きく影響したものと思われる。

ミカン

比岐島の人々は半農半漁で生計を立てていた。島の山には段畑が開かれ、ミカンを栽培した。ミカンが導入される以前は麦やサツマイモがつくられていた。

ミカン栽培は秋から冬にかけての収穫期が忙しく、この時期は農業に集中するが、それ以外の時期は島の周辺で刺網、一本釣り、イカ籠、タコツボなどの小規模な漁業を営んだ。なお比岐島の人々は桜井漁協ではなく、今治漁協に所属していた（現在、愛媛県は県一漁協に合併しているので、今治支所）。

森船長によると、比岐島のミカンは小ぶりで皮が薄く、甘みが強くて非常に美味しく、今治周辺では高い評価を受けてきたそうだ。島は日当たりがよく日照が豊富で、しかも海藻を肥料に使っていたためだという。確かに海藻はカリウムが豊富だからミカンにとってはいい肥料だった。まだ島でミカンが栽培されていた 10 年ほど前、通常のミカンが 10ｋｇあたり 1,000 円だったのに対し、比岐島のミカンは 3,000 円もしたそうだ。森船長は島のミカンの輸送にも関わっていたという。

集落の裏にミカンの木が 10 本ほど植わっており、少し黄色くなった実がけっこうなっていた。雑草が刈られているところをみると、時々手入れに来ているに違いない。船長から美味しいと聞いたものだから 1 個だけ失敬して食べてみた。厚木の家で作っているミカンは兎に角酸っぱいが、確かに皮は薄く、まだ十分に熟していないにもかかわらず酸味が少なくて濃厚な味だった。

海岸近くに収穫したミカンを寝かしたと思われるミカンの倉庫が建っていた。屋根の上に換気塔がつき、小屋の内部の空気を放出していたようだ。また収穫したミカンの運搬に使用したと思われる小型の運搬車も倉庫に残されていた。

島の生業は以上のように半農半漁であったが、もう一つの産業として採石業が営まれていたらしい。島で採った石は今治港の造成に使われたという。もちろん一時期の話だが。

集落裏に残るミカンの木（左）、ミカンの貯蔵倉庫の換気口（右）

小中学校跡

集落の東はずれに旧小中学校が当時のまま残る。今治市立美須賀小中学校比岐島分校といった。教室内にこの小中学校の歴史を記した子どもたちによる手書きの年表が掲げられていたが、それによると現在の校舎が建ったのは 1959（昭和 34）年のことであった。この間の児童・生徒数の推移は図１に示すとおりで、最も多い時には 24 人が在籍していた。しかし、子どもの数は年々減少、1978（昭和 53）年度に小学校が閉校、中学校は３年後の 1981（昭和 56）年度に閉校になった。以来、40 年間にわたって小中学校は閉校当時のまま残されている。

最後の卒業生は、この年表によれば浩二君で、1966（昭和 41）年生まれだから今年で 55 歳になっている。森船長は閉校前後のことを知っており、50 年ほど前には３人（男１人、女２人）が学校に通っていたのを覚えているそうだ。早瀬さんの兄弟ともう一軒の家の子供だったという。

学校の入口には 1970（昭和 46）年に子供たちの手によってつくられたトーテンポールが半世紀の風雨に耐えて残っている。

教室は４つほどあり、一つの教室にはトラックのタイヤと思われる大きなゴムのチューブが６本置かれていた。海水浴か何かに使ったものだろうか。食器棚には茶碗や湯呑などの食器類も残る。教室の壁にはロープの結び方の模型が掲げられていたことから、実践的な教育も行われていたのだろうか。音楽室には太鼓や木琴などがある。洗面所もトイレもきれいだし、窓ガラスは１枚も割れていない。きわめて保存状態かいいことから、誰かが定期的に手入れや掃除に来ているのかもしれない。

旧小中学校の校舎とトーテンポール（左）、今も残る教室と黒板（右）

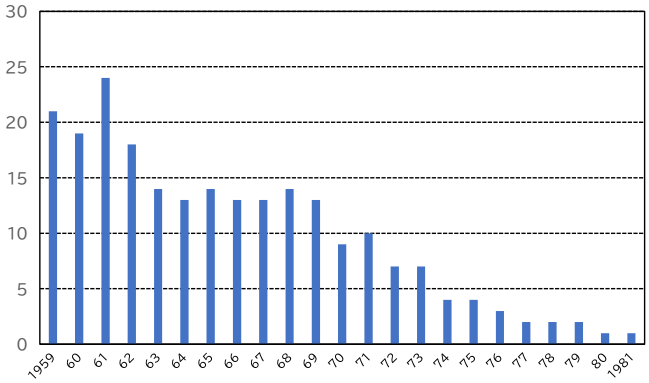


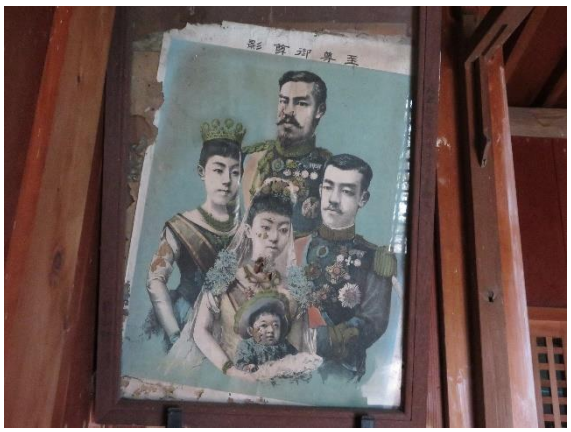
図１　比岐島の小中学校の児童・生徒数の推移

三島神社

旧小中学校の脇に三島神社の鳥居がたつ。海岸沿いの道路はここで行き止まりになり、鳥居の先に山道が上へと伸びている。道幅が広く、しかも雑草も繁っていないので登りやすそうだったから、そのまま進む。周囲はウバメガシの原生林に覆われている。数百mほど歩くと神社が現れた。

神社の周りもきれいに掃除が行き届き、島に人が住んでいるのではないかと錯覚させるほどだ。ただ蜘蛛の巣が行く手を阻むため、付近の枯れ枝で除去しながら進むことになった。拝殿の扉を開けて中に入り、参拝する。神棚にはカップ酒が献納されていた。室内には太鼓の他に、絵馬や島の人で戦死したと思われる肖像画、大正・昭和の天皇皇后陛下を描いたと思われる皇室の肖像画、波濤を越えて進む軍艦の絵などが掲げられていた。おそらく戦前からのものがそのまま保存されているのだろう。きわめて貴重な資料といえる。

旧小中学校の跡といい、三島神社といい、管理が行き届いており、これまで見てきた無人島や数世帯しかいなくなった島に共通にみられたような荒廃は感じられない。誰かが人知れず献身的な取り組みをしている不思議な島だ。



三島神社の拝殿（左）、拝殿内に掲げられた皇室の肖像画（右）

島の集落は端から端まで 300mもないので、見るところは他にない。山はイノシシがいるし、道もはっきりしていない。藪漕ぎの本格的装備をしていないので山に入ることもできない。人がいないから話も聞けない。そんなことから 10 時 10 分に島を離れる。島の滞在時間は 33 分であった。

今治港に戻り、歩いて今治城まで行き、天守閣に登る。天守閣から比岐島を含め燧灘に浮かぶ島々を一望できる。ただ比岐島はセメント会社の塔が邪魔をしてきれいな写真を撮ることができなかった。

今治駅を 12 時 10 分に出発し、松山駅へ。駅前のハルピンという中華料理屋で遅い昼食を食べる。市電に乗って南掘端で降り、県立図書館に行き、関連資料を閲覧、必要箇所をコピーした。その後、予讃線で宇和島に向かった。

今治城の天守閣から比岐島を望む